

無相文雄師の戯著

龜田次郎

大抵の人間は、本業の外に餘技を持つてゐる様であるが、甚しきに至つては、本業よりは、餘技の方が却つて世間に名高く響き涉つてゐて、本業の方が殆んど全く知れてゐない人も澤山ある。今、自分は稀代の音韻學者として、世に景仰せられてゐる我京都了蓮寺無相文雄師の餘技に成つた一戯著について、聊、述べようとおもふ。而も此の戯著は、刊行されてゐるにも拘らず、今日、已に、稀覯本となつてゐて、世間には、最早、殆んど誰にも知れてゐない様である。自分の此の一篇が、世の好事家の參考になれば、結構であるとおもふので、敢て、茲に、紹介する譯である。

二

一世の鴻儒荻生徂徠には、其の著述目録にも見えてゐる如くに、「廣象棋譜」二卷を著してゐるが、これは其の歿後の明和七年正月に出板されてゐる。徂徠は此の技を好んで、初段程の力あつたといふ。元來、負嫌の性質で、人の後につくことを肯んじないためか、或は、また、兵を談ずることを好んだ餘りにか、自分で一種の象棋を創めた様である。此の一書が、それである。僅々、十枚の全篇漢文で記述された美濃紙本に過ぎない冊子であるが、今日まで存して

る。只、不幸にして騎總、天馬、軍師、旗鼓、霹靂などの馬子の行度に、誤謬があつて、用ふることが出来ない相である。惜しむべき事である。此の事については、下記宇佐美惠の本書圖解序文中にも見えてゐるのみならず、又、當時の棋聖大橋宗桂も評して、乃公に相談でもありしならば、今少し面白くして、世に行はれる様に任せて參らせんものを、といつたといふ事である。こは兎も角、徂徠の廣象棋は、後年まで傳はつた様である。明治時代の棋聖小野五平所藏の、毛塚源助といふ寛政天明頃の人で、江戸小綱町に住んで居た大橋宗順門人、技六段あつた人の自筆の冊子の末に、此の廣象棋傳來の系圖があつて、此に據ると、徂徠から古川章甫に傳へ、古川章甫はこれを其子市川章甫に傳へ、章甫これを片瀬佐右衛門、島田久兵衛、松屋源右衛門、の三人に傳へたとある。此の中の島田久兵衛は江戸の人で、毛塚源助と殆んど時を同じうした五段の棋客であつた事は、大橋宗英撰「將棋奇戰」にも見えてゐるから、徂徠の廣象棋も寛政頃までは、稀に、之を玩んだ者もあつたと見えるのである。

此の徂徠「廣象棋譜」は、如何なるものなるかといふに、其の見返には、

徂徠先生著

翻刻必究

廣象棋譜

同圖解一本

盤一枚
駒百八十
行法一枚

とあり、卷首に下の行書體で記された序文が見える。

廣象棋譜叙

余讀^テ廣象棋譜^ニ、而知^ル物^ト夫子之才之美之天授^{ナル}云、蓋其唱^ル復古之道^ヲ也、年免過^ニ五十二^ヲ而其易^ル寶^ヲ也六十三^{ナリ}、則塵々

十數年之間耳、而不下但於六經、則彬々上矣、他至三子史百家術藝之事、皆漢唐宋明諸大儒之所不能明者、發揮提正、譬爲成書、乃從後觀之、戶牖牆壁、置筆經營、宜日不暇給、何以綽々然有餘力、而創是遊戲之事、乃知命世之人、雖執掌拮据之際、胸中別有悠々閑日月、而優爲之、宜乎後世雖有三通儒高才、而無得而踰焉、此譜也、夫子燕居一適、雖不足廣布于世、然君子之爲、一戲一遊、無非事者、則意不無所寓也、蓋、昭代統禱子弟、食祖先之餘德、而不知兵之爲何物、則使習行陳軍伍之名於衽席上、自生安不忘危之心、乃不爲小補矣、豈可與世俗所謂圍棋象戲之一於遊戲者例視哉、且又夫下夫傲儒僻學之對豪士晚生、而夜郎自誇吹毛求疵、欲傷於日月者、知夫子者天授、不可階而及也、亦非小補矣、乃梓之不可已也、明和六巳丑年冬十月

上毛 字世播撰

東都 河保壽書

これは字世播、即ち片山兼山の文である。河保壽は、當時の書家で、字子昌、號中臺、一號鵲巢主人といつた人である。而して著者徂徠自身は本文の首に、

廣象棋譜

古象棋以教兵制也、然太簡淡似無味、溫公七國、錯雜弗專、此方迺有大小摩訶諸戲、亦鄙陋甚、殊非雅士所翫矣、夫博奕者、仲尼見取、君實豈無稽而然乎、今因古制而廣之、聊且俾童蒙嫻軍伍之名、不無微益、中道而廢、有以時乎游焉、亦何害耳、其局就用棋局、不更設也、路上列子凡一百有八十、而黑九十、白九十、

無相文雄師の戲著(龜田)

圓如^{ナレト}三棋子^ナ、亦古制也、面粉墨署^ス、隨^テ黑白^ニ殊也^セ、背黑白^ニ皆殊署^ス弗^レ殊也^セ、其位置行法如^レ左、と抱負主張を述べてゐる。子には、將、記室、參謀を初めとして他に、親兵、力士、舍人、舍餘、軍吏、軍匠、神僧、高道、中軍、旗鼓、護兵、千總、把總、百總、前衝、後衝、佛狼機、象、弓、弩、砲、馬兵、騎總、步兵、步總、牌總、牌、車總、車、先鋒等があつて、甚だ、軍伍の實に近い。子の數、一軍九十、兩軍相合せて一百八十、局の大きさ、縱横、各十九路である。此等の各子の位置、行法、變、賞格、及び譯について詳しく説明してある。此等も、亦、凡て漢文で記してある。今は其の冗を厭ひて、一々記さない。尤も、徂徠の叙述には、多少の瑕瑾誤謬があつたとはいへ、後年まで傳はつて、其の刊本も、今日、尙、世に存在して、世人に繙讀され、好事家の間には持て囃されてゐるのである。

三

斯く一世の鴻儒徂徠の創意に成つた此の「廣象棋譜」も、難解の箇所や、多少の瑕瑾誤謬の點があつたので、これが訂正や註解が必要になつたのは、自然の趨勢である。此の要求に應じて、茲に、其の説明註解の書が現はれた。それは稀代の音韻學者無相文雄に依て著はされてゐるのである。書名は、上記徂徠の「廣象棋譜」の見返に附記してある通り、「廣象棋圖解」である。然し外題、題簽には、この様に印刷されてゐるが、内題や柱には、「廣象棋愚解」と記されてゐる。おもふに、これは、元來、文雄の餘技の戯著であるから、内題の方が、本來の書名であるが、書肆が刊行の際、故意に、外題又は改めたものであると考へる。此の圖解即ち愚解も、亦、前篇僅々十丁の美濃紙本一卷である。彼の徂徠の原著が全部漢文であるのに反して、此の文雄の註解は、序文文が漢文で、他の本文は、全部、片假名交り文で記されてある。「廣象棋譜」刊行後三年、安永二年正月刊行である。彼の徂徠の著と同じく、此の文雄の著も、ま

た、其の歿後の刊行である。而も兩書共刊であるから、兩人の歿後に、知友、門人が刊行したものである事は、各、其の序文の中に記されてゐるのでも明かに知られる。文雄の圖解即ち愚解の内容の概要を下に述べよう。卷首に次の序文がある。

刻廣象棋譜愚解序

濱瀨篠徳卿持ニ廣象棋譜愚解ニ來謂レ余曰是文雄師所レ述也師既沒矣而譜近刊行此解亦可レ行乎請是ニ正之ニ託レ余而去余
 因比ニ考譜頭レ解師雖レ勤乎猶有レ未レ盡其叙レ由亦小違ニ本旨ニ余故反覆熟讀改正數過以授ニ梓人ニ他作ニ譜解ニ者往往而有
 共未レ得ニ全備ニ余之改定猶恐ニ其有ニ紕謬ニ世之巧ニ此戲者更有レ所レ考矣

明和壬辰仲冬南總宇惠序圖解

と見える。宇惠といふは、徂徠の門人宇佐美恵で、號澗水、字子廸、通稱恵助、上總人、松江藩に仕へた人である。此の序文で見ても、文雄の註解にも、尙、多少の瑕瑾誤謬があつて、宇佐美恵が、更に、手を入れた所がある様である。宇佐美恵も物門で、餘暇に此の象棋を闘したのであらうとおもはれる。又、文雄は、物門の太宰春臺に學んだ人であるから、其の師春臺が物門で、また此の象棋を習つたのを、更に、教習されて、其の孰で同窓と寸暇閑散の折に、此の技を闘はした事と察せられる。文雄に、此の註解書のあるのは、正に、然る所である。文雄は、卷初に於て次の如くいつてゐる。

廣象棋譜愚解

京師了蓮淨寺沙門文雄僧谿

無相文雄師の戲著(龜田)

物子ノ廣象棋譜一卷篠德卿寄セ示シテ其義ヲ詳ニセンコトヲ請フ予周覽卒業シテ解セザル者多シ是ヲ曾苞卿ニハカ
 ル苞卿ヨミ終リテ粗解スナヲ未ダ盡サバ爾者アリ是ニ於テ予更ニ熟讀スレドモナヲ未ダ解シヤスカラザル所アルヲ
 覺フ未ダ此術ヲ知ル人ヲ得ザレバ問究ルコトアタハズ試ニ愚按ヲ以テ解ヲ作り且子ヲ制シテソノ術ヲ試ム物子ノ意
 ハ中華ニ古象棋ト云フモノアリ軍伍ノ制ヲ教ルナリ然レドモハナハダ簡淡ニシテ面白クナキヤウニ思ハル司馬溫公
 ノ七國象棋ト云モノアリ秦楚齊趙韓魏燕ト七國ニ分ケテ七人ニテサスヤウニシタルモノナリ二三人四五人ニテモサ
 ス唯入り交リテ專一ナラズ 本邦ニ小象棋中象棋摩訶大象棋ナド云ルモノアレドモミナ鄙陋ニテ雅士ノ翫ブベキ者
 ニアラズ象棋ハ雙陸圍碁ノ類ナリ孔子ノ語ニ不^レ有^ニ博奕者^ニ乎^爲之^猶賢^ニ乎^已トノ玉ヘリ人ハ何ゾニ據テ樂ムコト
 ナケレバ淫欲ヲ生ズルモノユヘ作業ナクシテ徒ラニ日ヲ送ルヨリハ雙陸ヤ圍碁ヲスルハマサルトナリ益スル所アル
 ヌヘナリ溫公モ聖言ヲ稽ヘズハ作ラルマジキナリ今コノ廣象棋ハ古象棋ニ本ヅキテ益廣メタルモノニテ軍伍ノ法ニ
 準シテ作りタレバ軍伍ノ名ヲ知モ一益ナリ論語ニ中^レ道^面廢^スアレバ道ノ中ニ居テハナレズハ間暇無事ノ時ハタマ
 ノノコノ戯ヲモテアソブモ害ニハナラジトナリ畢竟勝負ヲ樂ミトスルニハアラデソノ術ヲ娛トスルノ意ナリ局ハ常
 ノ棋局ヲ用テ別ニ廣象棋ノ局トテ制ラズ子ハ棋子ノ圓サニ制リ棋子ヲ置クヤウニ筋ノ上ヘナラブルナリ子ハ都合百
 八十アリテ黒九十白九十ナリ子ハ棋子ノ圓サノ如クニスル古制ナリトナリ面背ニ子名ヲ署ス白子ニハ黒ク黒子ニハ
 白ク署ス背ノ變子ノ名ハ白子黒子トモニ同ジク未ニテ署ス位置行法ハ左ノ如シトナリ位置トハ子列ナリ一路二路ハ
 一筋二筋ナリ我が前ヨリ一筋目ヲ第一路トイフ六路マデノ内ハ我ノ營ナリ營ノ内ヘ他ノ子入レバ變ナリ行法ハ子ノ
 行道ナリ將ハ大將ナリ將死レハ敗ナリ又將死テモ中軍ト旗トアルトキハ敗トセス又中軍變テ帥トナレバトヒ將モ

旗モ死テモ敗ニナラズヤハリサスナリ

と、其の主旨を述べてゐる。序文や此の文首に見える篠徳卿や、曾苞卿といふ人は、誰であるかといふに、徳卿は、石見濱田藩士小篠敏^{ササキ}で、鈴屋門の巨擘、兼ねて漢學をも善くし、又、御野^{ミノ}とも稱した。鈴屋翁の名著「漢字三音考」に、漢文の序文を書いてゐる。漢學も出来る人であつたから、同時代の同學者とも交際してゐて、其の關係から、徂徠門下の人々や、其の門流を汲んでゐる文雄とも、交渉があつたのであらうとおもはれる。苞卿は、曾我部元寛で、阿波の人、號容所、字苞卿、式部と稱した。矢張、文雄と同時代の漢學者である。文雄は、次に、子の位置を圖示し、行法を詳細に説明圖解してゐる。これは冗長になるから、一々、茲に、述べないで、凡て、省略しておく。只、特に注意しておかねばならぬ事は、文雄の愚解には、徂徠の原著中の子の行法中の瑕瑾や、誤謬が訂正してあるのである。然し、此の訂正も、宇佐美恵の序文にも見える如く、尙、未だ、完備したものとはいへない所もある様である。文雄の註解を、更に、宇佐美恵が訂補したとあるが、それでも、まだ、不完全であるのである。卷末に、

廣象棋布陳法 サシクミ 續出

司馬溫公七國象棋 近日出來

七人ニテサスナリ或ハ二三人
ニテモ兼テサス

と記されてあるが、此の二部の書は、果して、公刊されたか、否や不明である。多分、未刊で終はつたとおもはれるのである。然るに、三年後の安永五年出版の「溫公七國象棋圖」といふ一卷本が、世に存してゐる。これはまた「溫公七國象棋圖國字解」と稱して、表題を異にせるものもある。同本異名である。殆んど時代を同じうしてゐるから、或

は、これが前掲の中の後者では無いかとおもはれるのであるが、この書は、江戸の儒者で、字伯修、千藏と稱し、號は南陽といつた人で、井上金峨に學んだ菊池武愼の著であるから、全く、其の著者を異にしてゐる。別種のものであらうとおもふ。

以上徂徠の「廣象棋譜」、文雄の「廣象棋愚解」の二部は、拙藏本では同時に共刊されてゐる。出板書肆は、有名な慶元堂松澤老泉、及び其の一門の家から刊行されてゐるのである。即ち拙藏本の奥付には、

古本新本總て書物類何にても出精仕下直に奉差上候御下本御交易物等高直に頂戴可仕候御用向被仰付可被下奉願上候

と行、草二體で記し其次に

書物店

江戸淺草新寺町 和泉屋庄次郎

同東門跡前 和泉屋庄八

同横山町三町目 和泉屋金右衛門

越後柏崎 和泉屋七兵衛

と楷書で記してある。和泉屋庄次郎は、松澤慶元堂老泉の事で、以下は、其の分家や別家である。尙、拙藏本愚解の最末に、江都書肆の四字文印刷して其の姓名が見えない。これから推測すると、或は拙藏本は後刷本で、以前に、他の書店から「譜」と「愚解」と別々に出版した前刷本があつたかも知らない様にもおもはれる。今では稀觀に屬するものであるから、他に對照する事が出来ないので、姑く拙藏本に據つて出板書肆を上記の如く示しておく次第である。茲

に、疑を存して、後日の調査探究に俟つ事とするのである。

四

以上叙述した所を以て、徂徠、文雄二學者の戲著の概要は明かになつたとおもふ。後世に於ける學者にも餘技の戲著は其の類例はいくらも在る。今、此の象棋に關する二三のものを示さう。漢學者では、後、寛政年間に至つて備前の草加定環は、「唐山象戲譜」二卷半紙本型を出版してゐるし、博覽家では、文政初年に於て、豊後の鶴峰戊申は、「中將棊絹節」二卷、「大將棊絹節」一卷を美濃紙半切型を刊行してゐる。前者は、支那將棋のもので、後者の二部は、日本將棋のもので、而も、今日迄、廣く行はれてゐる普通の將棋、即ち小象棋を初めとして、現今、已に、行はれてゐない、寧、廢滅に歸したとも稱すべき中象棋、大象棋、大々象棋、摩訶大々象棋、秦象棋の所謂象棋六種の圖式を示し、其の位置、行法を詳細に説述してゐるのである。此の二人は、只、其の著しき者である。尙、他にもあるであらう。これで觀ても、國學者や漢學家の間には、學究の傍、其の間暇無事の時に、此の技を弄び、從うて其の餘技として、一廉の名手もあつた様である。現代でも、各方面の學者に、此の技の達人もあるのである。嘗に、學者間でなく文人や作家にも大分、此の類例に入るべき人がある。蕉門十哲の一人たる支考は、古の「庾開府象戲賦」に對して、「將棋の賦」の作がある。才筆縱橫、所謂俳文の上乗といふべきものである。此の支考の賦の後に、村野航が「讀將棋賦」を附けてゐるが、此の文も亦、佳作である。二篇共に支考の自著「本朝文鑑」に収録されてゐる。小説家の泰斗曲亭馬琴も、平素は寸陰をも惜んで著作に従事した人であるが、壯年時代には、將棋を弄んだ様である。其の著作の小説雜書の中に、將棋に關するものが二部ある。一は、「春駒將棋行路」で、享和元年板で、彼三十四歳の時の作である。

一は、「盤州將棋合戦」で、文化十四年板で、彼五十歳の時の作である。馬琴も、支考も同じく將棋を弄んだ事がわかるのである。此の外、近松巢林子の作「山崎與次兵衛壽門松」に、與次兵衛治部右衛門將棋をさす段があり、式亭三馬の作「浮世風呂」に、やくざものども將棋をさす條がある。巢林子も三馬も其の技は餘り上手でなかつた様であるが、多少は心得てゐた様におもはれる。尙、山東京傳には、其の作に「娼妓綉節」といふのがあるが、これは、只、書名を擬して選んだに過ぎないものであつたらうとおもふ。延いては、現代でも、幸田露伴氏の如きは、斯道は勿論、他の雜藝に於ても造詣の深いことは天下周知の事である。自分は徂徠、文雄の戲著の餘論として、茲に、以上の事實を述べたのである。

五

徂徠創意に成つた一戲著が、延いては文雄の其の註解書の出現となり、後年、尙、其の聲に效つて、斯種の類書が國學者や漢學家や文人の手に依つて著はされた。此等は、何れも、皆、それ等の人々の餘業に過ぎないとはいへ、自分は一世の鴻儒の一小冊子が、稀代の韻學家をして其の註解まで著はさせて、尙、後世迄も其の影響を及ぼした事をおもつて、實に驚嘆に堪へざるものがある。それで自分は此の一篇を草するに至つた所以である。

(昭和十三年一月二十日稿)